

核戦力を強化する中国海空軍

漢和防務評論 20150703 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は米国のトマホークに類似した核弾頭・通常弾頭兼用の長剣 10 型(CJ-10) 巡航ミサイルを開発し、旧式爆撃機 H-6 に搭載しようとしています。この巡航ミサイルは射程が長く、精度が高く、H-6 の航続距離と複合するとアジアのほぼ全域が攻撃可能な範囲に含まれます。

従来の中国の核戦力は弾道ミサイルが主で、戦略爆撃機は旧式で役立たず、戦略核ミサイル潜水艦は稼働率が低く、港に停泊した状態が常に見られる状態でしたが、新型の戦略核ミサイル潜水艦も開発中であり、J-10/H-6K が有効に機能し始めると、中国は米国に対抗する世界戦略を見直すのではないかと思います。

KDR バンコク平可夫特電：

中国海空軍は、海上発射型及び空中発射型の長剣 10 型巡航ミサイル (CJ-10) の装備数を増やしつつある。米国及び周辺国にとっての新たな脅威は、長年にわたり第二砲兵のみに依存してきた中国の核戦力が多様化することである。特に水上艦及び H-6K 型戦略爆撃機が CJ-10 を搭載すると、米国及び周辺国に対する核の脅威が大幅に増加する。



CJ-10 を搭載した中国の H-6 爆撃機

INET : http://japanese.china.org.cn/culture/2013-03/19/content_28288041_2.htm

KDR が過去に報道したが、従来の中国軍は、老朽化した H-6 シリーズ爆撃機、精密誘導でない長距離ミサイル更には唯一の戦略核ミサイル潜水艦 (SSBN) 092 型の低い可動率等、實際上三位一体の核戦力を保有していなかった。しかし H-6K、新たな 094 型及び 093G-2 型核ミサイル潜水艦、052D 型ミサイル駆逐艦 (DDG) 及び航空母艦の就役により、中国軍の三位一体の核戦力は正に建設中であり、しかも迅速に発展中である。

H-6K 爆撃機は、大型化したデータリンク及び衛星通信受信装置を装備していることから、戦略爆撃機の特性を具備しており、更に周辺国に対する CJ-10 巡航ミサイルによる核攻撃能力を有している。巡航ミサイルを保有する国家は、パキスタン、イスラエルを含め少なくはない。しかし空中発射型巡航ミサイルを有する国家は、米、ソ (露)、中国のみである。この種ミサイルは、米ソの戦略兵器削減条約 (START I / II) の対象になるが、中国は如何なる国際条約の制限も受けていない。

射程 2000 KM の CJ-10 を作戦半径 2000 km の H-6K に搭載すると、周辺国は中国空軍の核弾頭／通常弾頭兼用の巡航ミサイル CJ-10 の脅威にさらされる。最も直接的に脅威を受けるのは、ロシア、日本である。日本全土、インドの大部分 (およそ 5 分の 4 の国土) が CJ-10/H-6K の攻撃範囲に含まれる。ロシアは、極東の全ての重要都市、ウラル地方の全ての人口密集地が CJ-10/H-6K の攻撃範囲に入る。H-6K は、CJ-10 の射程の長さから、たとえ中国国境を超えなくとも全てのロシア極東の都市、カムチャッカ半島、日本全土、インド北部・中部に核攻撃又は通常弾頭による精密爆撃を行うことが出来る。シンガポール・オーストラリア (埋め立てられた南シナ海の飛行場から離陸) 及び一部の米軍基地を含む全ての東南アジア国家は、CJ-10/H-6K の攻撃範囲に含まれる。

航空兵第 36 師団 (陝西省寶鶏) の H-6K は、ウラル山脈からの距離がわずか 2200 KM であり、實際上、蒙古の防空能力が極めて貧弱であることから、必要時 H-6K を蒙古上空に侵入させ対露攻撃を行うことが出来る。中央アジア全体、イランの一部も CJ-10/H-6K の攻撃範囲に入る。

現在、H-6K は少なくとも 2 個連隊が装備していると見られる。1 個連隊の H-6K を 18 機として計算すると、1 回の攻撃に 216 発の CJ-10 を携行することが出来る。もし国境や公海を飛び越えるために航続距離や飛行速度に制限を受けるとしても、1 機の H-6K は少なくとも 4 発の CJ-10 を携行することが出来、全部で 144 発になる。

冷戦後の局地戦争では、米軍のトマホークは、全て水上艦、戦略爆撃機 (B-52H、B-1B) 及び核ミサイル潜水艦から発射された。およそそれぞれ 3 分の 1 ずつである。

戦時、周辺国に対しては、第二砲兵の陸上発射型 CJ-10 による第一波攻撃が行われ

るであろう。したがって第一次攻撃において、中国は 300 発前後の CJ-10 を発射する可能性がある。米軍のアフガンに対する第一波攻撃では、最初の日に約 400 発のトマホークを発射した。湾岸戦争では、第一波攻撃に約 600 発の巡航ミサイルを発射した。

ロシアは、中国が H-6K に D-30KP2 型エンジンを搭載しているのを知っているのだろうか？

KDR 記者はこの件をロシア国家武器輸出入総局 (ROSOBORONEXPORT) のアジア地区担当者に問い合わせた。彼は：我々は D-30 エンジンを中国に輸出した。その理由は、当初の 38 機の IL-76 輸送機の輸出契約が、ウズベキスタンで同機の生産が不可能になり契約が履行できなくなったためであり、両国の友好関係と商業上の信用を維持するためであった。したがって我々は率先してサブ協議を提案し速やかに 250 台の D-30 を中国に提供した。これは我々の努力の結果である。なぜならこのエンジンはロシアで生産されているからである、と述べた。また彼は：我々の協定書には、D-30 は IL-76 のみに使用する、と明確に書いてある。中国側は、現在使用中の IL-76 の補備用エンジンとして必要だと言っていた。爆撃機に転用できるとは協定書に書いていない。当然後になって我々は、このエンジンが戦略爆撃機に転用されていることを知った。米国だったら、直ぐに制裁を課すところだ。しかし我々には何ができる？と述べた。

H-6K/CJ-10 は、有事に日本、オーストラリア及び東南アジアに対してどの程度影響を与えるか。これらの国家は、米国にどの程度軍事協力するか？基地や後方支援を提供するか？これは十分に注目すべき問題である。

中国海軍に関して、過去、中国海軍の水上艦艇は小型であり戦術核兵器を搭載できなかった。秘密が暴露され、米国の空母艦隊は必要に応じ戦術核兵器を搭載することが出来ることが分かった。現在、中国海軍は、自前の空母艦隊を編成し、093G-2、052D は、新型の通常型垂直発射機を装備した。これらの発射機は現在 CJ-10 を発射できるだろうか？これは知り得ない。しかし通常型であろうとも必要ならば CJ-10 を装填することが出来る。火器管制装置のソフトウェアを更新すれば、中国国産の武器なので難しいことではない。しかし KDR の評価は次の通り：上述の水上艦艇の垂直発射機の数が少な過ぎる。現在は依然として YJ-18 艦対艦ミサイルが主である。055 型大型ミサイル駆逐艦、095 型 SSGN の時代が来れば、CJ-10 専用のプラットフォームが開発される可能性が極めて高い。すなわち巡航ミサイル核潜水艦の開発である。このように将来、中国海軍の水上艦、核動力攻撃型潜水艦もまた戦術核兵器を携帯できるようになるであろう。当然現在でも 093 SSGN 及び一部の水上艦が核魚雷を装備している可能性は否定できない。CJ-10 専用の発射機が開発されると、海軍水上艦、潜水艦の対地核攻撃能力が大幅に高まる。今後 10 年、グアム島、米軍オーストラリア基地に対する核攻撃戦力は、第二砲兵

の核弾道ミサイルだけでなく、中国海軍潜水艦に配備された CJ-10 も H-6K/CJ-10 に比べ、より実戦能力を具備するようになるであろう。前者には隠密性がある。H-6K は、国境を飛び越えることが出来ないだけでなく、この 4 月、台南に米軍 F-18C が緊急着陸した事件によって、米軍の中国沿岸に対する監視の程度を明確に示し、中国軍機が随意に第一列島線に進出できないことを中国に知らせた。

これらの背景から、中国は核動力攻撃型潜水艦 (SSG) の生産を急いでいるようである。現在、093、093G、093G2 を少なくとも 5 艘生産し、091 SSG の全てを更新しようとしている。しかも 3 艘の 093 G2 は 1 年以内に出現する (2014 年)。このような建造速度に従えば、10 年後、5 乃至 10 艘の 093 G 或いは 095 を装備することが可能だ。そのときには、中国海軍の潜水艦核打撃能力が大幅に高まり、核弾頭／通常弾頭兼備の能力が高まる。

米国本土が他国から巡航ミサイル攻撃を受けるとすれば、それはロシアの他、中国しかない。今後、中国海空軍が核打撃戦略戦力になる場合、更に多くの投資が必要であり、その他に核兵器の運用原則、作戦思想にも変化が出てくるであろう。

台湾本島の攻撃に就いては、H-6K/CJ-10、H6H/YJ-63 型巡航ミサイルを使用する必要が無いことはすでに述べた。射程が 300 乃至 400 KM あれば、台湾の如何なる軍事目標も攻撃可能である。したがって H-6K の開発は、完全に米国及びその他の国家を想定したものである。

更に観察が必要なことは、中国海軍が H-6K の派生機を装備するかどうかである。海軍版の CJ-10 を装備するのか、或いはその他の型の巡航ミサイルを装備するのか？中国海軍は大量の H-6M を使用中であるがこれらの爆撃機を如何に更新するのか。

海軍版の CJ-10 を開発する目的は、軍港内に停泊する米軍艦艇を集中攻撃するためである可能性が極めて高い。亜音速の長距離巡航ミサイルは、航行中の戦闘艦艇を攻撃することはできない。このほか、もし海軍が H-6K を装備したならば、さらに大型の対艦ミサイルを開発する可能性がある。例えば、YJ-18 シリーズである。これは明らかにロシアの CLUB ミサイルのクローン型であり、ロシアはさらに航空機から発射される CLUB 型対艦ミサイルを開発している。名称は 3M-54AE、3M-14AE と称し、それぞれ艦船攻撃、陸地攻撃に使用される。射程は、400 乃至 500 KM である。また別の選択として、H-6K に搭載するクローン型の CX-1 型巡航ミサイル (ロシア YAKHONT 対艦ミサイルのクローン版) がある。

上述を総合すると、中国海軍は H-6K を導入して次世代型の超音速、大型対艦ミサイルを装備するであろう。そうなれば中国の対艦攻撃の縦深性が沿海から 400 乃至 600 KM に拡大する。その上、沿海地区に射程 200 KM の S-300PMU2 地対空ミサ

イルによる防空障壁を設置すれば、H-6K/超音速対艦ミサイルは、中国の沿海対艦攻撃能力を 600 乃至 800 KM に延伸し、対日米海軍の沖縄基地に対する直接の脅威となる、と KDR は予測する。

以上